第一章　労作歌

第一節　農耕に関するもの

一、草刈、田草取唄［夫れ夫れ節あり］

枯柴に止まる蝶々ありや二心、傍に青菜を持ちながら。
汗を流して田草取るは、稲はお礼に穂を垂れる。

（袖川村史資料）

二、田植唄

どっこいどっこいと、植えた田にこそ米がなる。
田植に来たか、植えねやなるまい苗代を。
歌がきりかな此田がきりか、苗がきりならつかみざし。
苗もよくとる田もよく植える、嫁にやらしゃれ大里へ。
ここの早乙女や若いでよいが、己が早乙女婆ばかり。
婆ならよいが、肥かけでも稲や出来る。
五月ならこそつぼひらもらえ、間につぼひら誰やくれず。
己が殿さのしんがい田じゃで、三株一把となる様に。
歌へお十七声惜しまずに、若い中こそ声がたて。
でかい田じゃで痛いわいな腰が、腰を延いて後を見る。
此処は道ばたこしゃんと植えて、三株一把となる様に。
下手な早乙女ツボイと入れて、そばで見ているかいしょなし。
早乙女植えんか、植えにゃ大水あてかける。
植えて育ててけじ迄したが、出る穂見るやらみまいやら。
晩の上りのおそなる時は、歌を早めて手をおろせ。
さつさつ植えて、通る殿さのお目にかけよ。
植えんかどうじゃ、植えにや追水あてかける。
のろけたわいな、誰か勇をかけてくりょ。
大だち引いて、人にどんどん笑はれた。
植えておくれよどなた様も、晩の上りがおそなるぞ。
五月つらいよ朝早起きて、晩の上りを待つわいな。
植えておくれよ早乙女衆よ、小苗大苗無いように。
来年からは、三株早乙女あおかまいか。
ここは道ばたさらりと植えて、通る殿さの目にかけよ。
嫁にやりたい寺林村へ、田地かかへて山おねて。
にわらかいて（はやしたてて）、植えた田にこそ米がなれ。
坪へはいりて出られんときは、嫁をとらせ中嫁を。

（袖川村史資料）

五月なりゃこそあなたの傍で、
　あえにゃ見るばか、思うばか。　［ばか＝ばかり］
歌はよけれど話はおきゃれ、
　話しや仕事の邪魔になる。

歌ひなさりょよ、お歌ひなさりょ、
　歌で御きりょがさがりゃせぬ。
泣いてくれるなわりゃなきゃおらも、［わりゃ＝お前］
　ついて涙が出るわいな。
となり婆さがこしゃこしゃ走り、
　どこでよい茶が煮えるやら。
ぼちゃんぼちゃんと植え度いけれど、
　どんびきの目があぶのて植えられぬ。
どんどどんどとしろかき流せ、
　可愛い早乙女居るじゃなし。
そこの早乙女若いで好いが、
　俺が早乙女婆ばかじゃ。

（上宝村史資料）

思いあてたよ五月の五日、
　蓬菖蒲の湯の中で。
腰が痛いで腰もめ殿さ、
　殿が病ませる腰じゃもの。
おらの若い時やたんぼのぎーあわず、
　人にふれてぎゃくぎゃくと。
おらのおやぢはどんぴきおやぢ、
　ひとつ飛んでやぎゃくぎゃくと。

わしの主さんあれやれこわい、
　童髪結うて洟出して。
五月なりゃこそあなたの側で、
　手苗くれたり貰うたり。

（飛騨の民謡資料）

今日は旦那の　田植にきたが
　うえざなるまい　苗代を
ぼいつけ　ぼいつけ　ぼいつけござい
　わしはねぶりねぶり　待つわいな
ここは往かん　さらりと植えて
　通る旦那の　目にかけよ
植えて三尺　はね出て五尺
　さてもめずらし　里らしや
植えて出るもの　植えて出る
　中でまうやつ　まゆをする
腰が痛いで　空見るわいな
　お陽のはずれを　待つわいな
わしの殿さは　代かきじょうず
　代にご難は　ないわいな
しちゃらばちゃらと　植えたいけれど
　どんぴき殿の目があぶのうて　植えられぬ
ひげの丈ほど　苗様のびた
　まゆ玉あられが　又ふき破る